

[特集]

特別支援学級の意義と今後の課題

特集にあたって

中村 尚子

通 常学校の一部を構成する特別支援学級の端緒は、明治期の小学校教育に遡ることがができる。しかしこれは制度的ではない。学習に遅れのある子どもなどに対応する必要が生じたことから特別な学級が設置されはじめた。制度は皆無に等しい状態であったが、まさに必要に応じて先駆的な実践がつづけられた。

戦後、学校教育法の下で初めて制度化されたが、実際の運用は市町村教育行政に負っていたためその様態はじつに多様である。近隣の教職員が集まると、入級の判断や学級集団の編成、教員配置、教育内容などで共通することが少ないとされる状態は、特別支援教育体制となつたいまも大きな変化はない。当然、全国的視野でみた特別支援学級の動態と、関係者が日々実践し、感じていることとの間にはズレがある。

本特集は、特別支援教育制度に移行して以降の特別支援学級の実態を明らかにすることと今後の課題を探ることをねらいとして出発した。企画にあたって、特別支援学級の特徴を勘案し、全国的動態と地域や学級の現場からの視点を重視した。

窪田論文は文部科学省統計を中心に、「増加」の実態を多面的に分析している。学級数、児童生徒数、学級設置率、在籍率などの増加とそれぞれの増加率の間にみえる違いは、先行研究でとらえられた90年代の動態とは異なる様相を呈していることを明らかにしている。

つづく越野論文は、特殊教育時代からあった特殊学級に関する諸課題について有効な改革を提示しないままに推移した特別支援教育の問題、すな

わち「一人ひとりの教育的ニーズ」という新しさを装いつつ、その制度的整備に着手しなかった無策を実態に即して論究する。「増加」は新たな地域差を生んでいるという指摘は重要であろう。

本特集のほとんどの筆者が指摘しているのが、自閉症・情緒障害特別支援学級における「増加」である。別府論文はそこに焦点をあてて論じている。特別支援学級の中でも障害の定義に曖昧さを残し、自治体によって運用の違いの大きい「自閉症・情緒障害学級」であるが、実践のあり方や通常学級との関係について、事実に基づいたていねいな議論の重要性を強調している。

在籍児の増加や障害の多様化に対応した特別支援学級の制度改革がないまま推移した特別支援教育のもとであっても、学校では、行動や言葉の中から子どもの心を読みとった実践が日々重ねられている。山東実践のテーマである「安心感と表現の喜び」、山下実践で描かれた学ぶことを正面に据えた授業で育つ子どもたちの姿、人も資源も不足がちな離島で特別支援学級があることの意義と地域とつながることの大切さを伝えてくれる永濱実践。これらの実践報告は、いずれも通常学級や地域との関係を重要視しており、インクルーシブな学校のあり方をも問うている。そして埼玉からの報告は、特別支援学級担任の専門性を確認し、集い、学びあうことで実践を高めていくことが必要だと訴えている。

本特集によって、特別支援学級関係者の新たなつながりが生まれることを願っている。

(なかむら たかこ 発達保障研究センター)